

コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

アオモジ (*Litsea cubeba* (Lour.) Pers.)



中村彰宏 (大阪府立大学大学院) nakamura@envi.osakafu-u.ac.jp

アオモジ (*Litsea cubeba* (Lour.) Pers.) はクスノキ科ハマビワ属の落葉小高木で、九州以南 (山口・岡山に隔離分布) から中国、マレーシア、インドに分布する¹⁾。初山²⁾は日本固有種とし、*L. citriodora* Hatusima という学名を採用しているが、村田¹⁾は大陸のものと区別すべきでないとした。本文では村田の意見に従い *Litsea cubeba* (Lour.) Pers. の学名を用いることとする。四国、本州以北では馴染みの薄い樹木だが、伊豆地方以西の自生地以外 (少なくとも福岡、徳島、兵庫三木市、淡路島、京都、大阪、奈良、三重、伊豆) で確認され、新聞などでも報道されたことのある国内移入種である。庭木にも用いられるが、わが国では花卉として栽培された。奈良県平群町では現在は栽培されていないが、徳島県から導入されて逸出した³⁾。今は山取りされており、サクラやモモに華やかさで勝てないため、両者の出回る前の12月下旬~1月に出荷するとの話を花卉栽培農家から聞いた。

滋賀県や京都市では製薬会社研究所に植栽され、周辺に逸出している。アオモジの果実はレモンのような芳香をもち、柑橘類に多いシト랄を含むため水蒸気蒸留によって精油が造られる。レモングラス (イネ科) と同様に家庭用のスプレー、洗剤などに用いられ、精油のほとんどは中国で生産され⁴⁾、メイチャンとの名でも販売されている。熊本では、中国の呼び名、山胡椒と同じヤマコーシュエとの方言名でよばれ、かつて香料会社が実を購入したという⁵⁾。

葉はクロモジに似て、枝は同様に楊枝に利用されるという。樹高は5mに達する¹⁾ というが、京都大学上賀茂試験地では14mの個体がある。早春に開花し (近畿地方では2月中下旬頃)、花序の大きな雄の切り枝が好まれ、生け花に利用される。

京都大学上賀茂試験地では植栽履歴があり、1958年の3



開花中の雌 (左) と雄 (右) 個体 (写真左) と法面周辺部に出現した開花中のアオモジ (写真右)

個体から2002年には67個体の開花個体に増加し、年間4.9mの速度で分布拡大した⁶⁾。果実は液果で1個の種子を含む。近畿地方では8月中旬から果実が熟し、種子はヒヨドリ、メジロなどの鳥に散布され⁷⁾、埋土種子を形成する⁸⁾。アオモジ生育地では、道路建設などの攪乱によって出現することがある。近畿地方では主に5月以降に発芽し、実生は地下子葉型でクロモジに似る。ギャップで多く出現するが、1年目の発芽率は10%程度と低い⁸⁾。1年で約1mまで成長し、アカメガシワより成長が速く⁸⁾、ヌルデ、アカメガシワとともに先駆種と考えられる。3~5年程度で開花・結実でき、比較的短期間で法面周辺などの攪乱地に鳥を誘引できると考えられる。攪乱地でも成長できるアオモジは法面緑化に利用できるかもしれない。クズで法面が覆われるよりは、美しいアオモジがある方がましではないかと思う。とはいえ、高密度の埋土種子形成後の攪乱地では、純林に近い群落をつくることのある移入種である。立地の悪い法面でも短期間に成長できる植物は、本来移入種として問題を起す特質を有するものではないのだろうか。長期的な視点からの生態系への影響を総合的に評価する必要があるだろう。

引用文献

- 1) 北村四郎・村田源 (1979) 原色日本植物図鑑, 保育社 545pp.
- 2) 佐竹義輔ほか編 (1989) 日本の野生植物木本 I, 平凡社. 321pp.
- 3) 森本範正 (1990) アオモジ生駒山系に野生化, 植物分類・地理, 41:201-202.
- 4) FAO (1995) Flavours and fragrances of plant origin, FAO, Rome, 111pp.
- 5) 倉田悟 (1971) 原色日本林業樹木図鑑第3巻, 地球出版, 259pp.
- 6) 中村彰宏ほか (2003) 近畿3府県におけるアオモジの分布とデジタルマイクロプロブによる樹齢推定, 日林学術講 2003 (第114回):502.
- 7) 橋本啓史ほか (2003) 近畿地方における逸出種アオモジの種子散布者は誰か?, 第50回生態学会:271.
- 8) 小林望美 (2003) 近畿地方に野生化するアオモジの分布拡大過程, 大阪府立大学農学生命科学研究科修士論文.

※ このコラムは、日本緑化工学会ホームページにカラーで掲載されています。ぜひご覧下さい。(http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrt/)



クスノキ科のクスノキ (左)、アオモジ (中央)、ハマビワ (右) の種子

アオモジ種子の乾燥重量は 54.5mg で、同属のハマビワ (四国、島根～琉球、朝鮮南部に分布、乾燥重量は 266.7mg、乾燥に弱く寿命は短そう) より軽く、固有種²⁾とすると分布ははるかに狭くなる。日本と大陸にも分布する¹⁾同じクスノキ科のクスノキの種子 (乾燥重量は 111.8mg) よりも軽い。重量の小さな種子ほど捕食から逃れ易い^{a)}ため寿命が長い^{b)}とすれば(そうではないとの説もある^{a)})、アオモジの種子寿命はクスノキの 8 年^{c)}よりも長くなり、種子重量の観点からは長期にわたる埋土種子形成と分布拡大の能力は大きいと考えられる。とすれば、沖縄と台湾の間に似た種の境界があり、主要な生育立地が沖縄から九州の攪乱地のみに限定されるのは考えにくい。アオモジが昔から日本に自生しているのなら、村田の指摘のとおり大陸 (台湾) と区別すべきでないとは筆者は考えている。

- a) Moles, A.T. et al. 2003: Ecology 84:3148-3161.
- b) Hodkinson, D.J. et al. 1998: Functional Ecology 12:762-766.
- c) 小澤準二郎 1950: 林業試験集報 58:25-43.



アオモジの実生 (左) と成葉 (右)



アオモジの果実 (右) と切り花用の枝採取のために切られた跡 (右) 果実は緑から赤、そして黒熟する。

アオモジ伐採跡地で更新したアオモジ群落



通常開花までには最低 3 年程度が必要と思われるが、萌芽個体では 1 年目の萌芽枝で開花したのもあった。写真は伐採から 4 年目の春の開花状況。